

読書

純文学

未知の快感との出会い

多和田葉子は「グローバルな作家」などという陳腐な枠に収めるのはもつたいない人だ。ドイツ在住、ドイツ語で書いた作品も高評価……という「越境」「異文化遭遇」といったレッテルが貼られがちだが、その作品に表現されるのはもつとんでもない世界である。

①はベルリンの街角を探訪する連作短編。のどかで平和で行儀のよさそうな設定だが、実際は主人公の脳内で脱線につく脱線が起きる奇妙キテレツな展開で、「ひよっとして実話？」と言いたくなる変な私小説臭まで漂う。こちらには思いもかけない「心のスポット」を刺激され、未知の快感と出合った気分になる。こんな小説をリアルタイムで読める幸福！

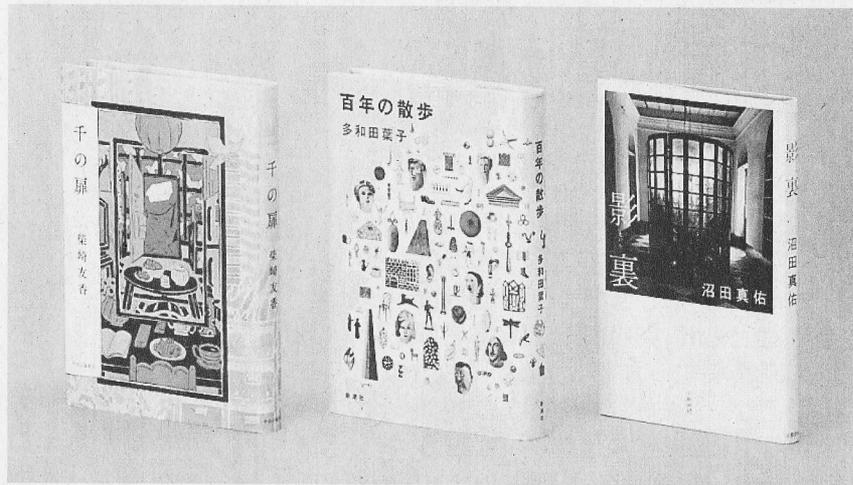
東京大准教授

阿部 公彦

②では、夫の祖父母の住んでいた団地を受け継いだ千歳が、その祖父に託された使命を果たすべく団地内を探訪する。現代の団地がたたえるエキゾチックな古さが描き出される一方、どこか世界の根に触れるようなごちっとした質感がある。

団地の扉の向こうにはさまざまな人生が垣間見えるが、千歳自身の扉が開けられるに及んで物語はぐいっと動く。静けさの中に、この世ならぬ緊張も感じさせる絶妙な筆遣いの作品である。

芥川賞を受賞した③に描かれるのは、大きなことは起こらないのになぜか動きの予感に満ち、事件や犯罪のにおいさえする不穏な世界。水面下で何かが暴れようとしている。その蠢きを、官能的なほどデリケートな文章で捉えている。成熟した文体感覚をそなえた新人。



「百年の散歩」など

- ①多和田葉子著「百年の散歩」(新潮社・1836円)
 ②柴崎友香著「千の扉」(中央公論新社・1728円)
 ③沼田真佑著「影裏」(文芸春秋・1080円)